带状疱疹ワクチン予防接種説明書

带状疱疹とは

带状疱疹は、過去に水痘にかかった時に体の中に潜伏した 水痘带状疱疹ウイルスが再活性化することにより、神経支配領域に沿って、典型的には体の左右どちらかに带状に、時に痛みを伴う水疱が出現する病気です。合併症の一つに皮膚の症状が治った後にも痛みが残る「带状疱疹後神経痛」があり、日常生活に支障をきたすこともあります。带状疱疹は、70歳代で発症する方が最も多くなっています。

《予防接種を受ける前に確認してください》

■一般的注意

- ・必要性や副反応をよく理解したうえで受けましょう。
- ・気にかかることや分からないことがあれば予防接種を受ける前に担当の医師に相談しましょう。
- ・予診票は、医師にとって予防接種ができるかどうかを判断する上でとても大切な情報です。基本的には本人が責任を持って記入し、正しい情報を医師に伝えてください。
- ・明らかに発熱のある人（通常37.5℃以上）、重篤な急性疾患にかかっている人、予防接種の接種液の成分でアナフィラキシーショックを起こしたことがある人は接種できません。
- ・心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患等の基礎疾患を有する方、予防接種を受けて2日以内に発熱や全身の発疹などのアレルギー症状があった方、けいれんを起こしたことがある方、免疫不全と診断されている方や、近親者に先天性免疫不全症の方がいる方、带状疱疹ワクチンの成分に対してアレルギーを起こすおそれのある方等は、接種に注意が必要です。

■带状疱疹ワクチンについて

～生ワクチン（乾燥弱毒生水痘ワクチン）～

接種できない方	病気や治療によって、免疫が低下している方	
注意が必要な方	輸血やガンマグロブリンの注射を受けた方は治療後3か月以上、大量ガンマグロブリン療法を受けた方は治療後6か月以上置いて接種	
带状疱疹に対するワクチンの効果(報告)	接種後1年時点：6割程度の予防効果 接種後5年時点：4割程度の予防効果 ※带状疱疹後神経痛に対しては、接種後3年時点で6割程度の効果	
主な副反応の発現割合	70%以上	—
	30%以上	注射部位の発赤
	10%以上	注射部位のそう痒感・熱感・腫脹・疼痛・硬結
	1%以上	発疹、倦怠感

～不活化ワクチン（乾燥組換え带状疱疹ワクチン）～

接種できない方	—	
注意が必要な方	血小板減少症や凝固障害を有する方、抗凝固療法を実施されている方	
带状疱疹に対するワクチンの効果(報告)	接種後1年時点：9割以上の予防効果 接種後5年時点：9割程度の予防効果 接種後10年時点：7割程度の予防効果 ※带状疱疹後神経痛に対しては、接種後3年時点で9割程度の効果	
主な副反応の発現割合	70%以上	注射部位の疼痛
	30%以上	注射部位の発赤、筋肉痛、疲労
	10%以上	注射部位の腫れ、胃腸症状、悪寒、発熱
	1%以上	痒み、倦怠感、全身疼痛

また、頻度は不明ですが、生ワクチンについては、アナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、無菌性髄膜炎が、組換えワクチンについては、ショック、アナフィラキシーがみられることがあります。接種後に気になる症状を認めた場合は、接種した医療機関へお問い合わせください。

■他のワクチンとの同時接種・接種間隔

いずれの帯状疱疹ワクチンについても、医師が特に必要と認めた場合は、インフルエンザワクチンや新型コロナワクチン、高齢者肺炎球菌ワクチン等の他のワクチンと同時接種が可能です。ただし、生ワクチン（阪大微研）については、他の生ワクチンと27日以上の間隔を置いて接種してください。

■接種を受けた後の注意点

- ・ワクチンの接種後30分程度は安静にしてください。
- ・体調に異常を感じた場合には、速やかに医師へ連絡してください。
- ・注射した部分は清潔に保つようしてください。接種当日の入浴は問題ありません。
- ・当日の激しい運動は控えるようしてください。

(引用：厚生労働省)

《予防接種健康被害救済制度について》

予防接種法に基づく帯状疱疹ワクチン予防接種によって引き起こされた健康被害（副反応）が、予防接種と因果関係がある旨を厚生労働大臣が認定した場合、市町村長は健康被害に対する給付を行います。

健康被害の程度などに応じて、医療費、医療手当、障害年金、遺族一時金、葬祭料などについて法律で定められた給付が受けられます。